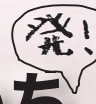


見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち



December

S	M	T	W	T	F	S
				1	2	3
4	5	6	7	8	9	10
11	12	13	14	15	16	17
18	19	20	21	22	23	24
25	26	27	28	29	30	31

December 2022 vol.104

◆ 豊堤

所在地：岐阜県岐阜市忠節町（忠節橋付近）

交通：岐阜バス忠節長良線「忠節橋」停すぐ

長良川は、高山市と郡上市にまたがる大日ヶ岳を水源とし、岐阜県・愛知県・三重県を流れ伊勢湾に注ぐ、延長166kmの河川で、静岡県県の柿田川、高知県の四万十川とともに「日本三大清流」とされ、鮎や鵜飼いが全国的にも有名です。岐阜市の中心部に近い現在の長良橋の下流では、昭和の初め頃までは3本（南から井川（現在の長良川）、長良古川、長良古々川）に分かれており、大雨が降ると、古川、古々川に水が流れ、ときには水が堤防を乗り越えてあふれ出し、繰り返し浸水被害をもたらしていました。

川北（井川の北）の住民の請願を受けて、国により、昭和8（1933）年には右岸（川北側）の堤防の工事が、昭和9年には古川、古々川合流点の付け替え、締切工事が始まり、昭和27年に工事は完了し、古川、古々川は締め切られ、右岸に約6kmの新しい堤防が築かれます。合わせて、左岸（川南側）の堤防も強化されることとなりましたが、川南は市街地であり、堤防に沿って家屋が連なっていたこと、また水深が深く川側への堤防拡築もできない事情から、左岸側では、特別にたくさんの鉄骨やコンクリート・玉石を使った堤防工事が行われ、「岐阜特殊堤」と呼ばれる堤防が築かれました。

特殊堤の特徴のひとつが、金華橋から忠節橋の区間（約900m）で堤防の上端に設けられた溝です。この溝は、長良川が増水した際に、壘を差し込んで堤防をかさ上げる効果を発揮するもので、壘堤と呼ばれるこのような構造の

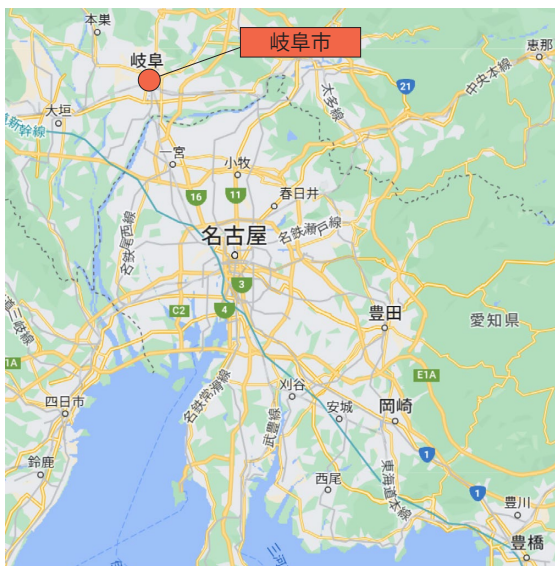
堤防は全国でも非常に珍しく、長良川のほかには、兵庫県の揖保川、宮崎県の五ヶ瀬川の3か所しかありません。

この壘堤、長良川では実際に壘を差し込んで増水に備えた経験はありませんが、揖保川では、2018年の西日本豪雨の際、氾濫の危険性が高まり、地元の、たつの市正條地区の自治会により壘が差し込まれました。豪雨当日は、自治会の役員の方々が、国から委託を受けたポンプ場の管理に伴って、揖保川の水位の状況を見守っていました。氾濫の危険が高まり、壘を入れる決断をしたのは午後11時過ぎでしたが、市の防災倉庫から壘をトラックで運び、30人の役員で手分けをして差し込んでいき、2時間ほどで全長200mの堤防に約100枚の壘を差し込み終わりました。作業が終わり、満潮を迎える午前2時前には、壘に届く寸前まで水位が上昇していたとのことです。正條地区では自治会役員の方々の防災意識が高く、西日本豪雨の10年ほど前から、毎年自主的に壘堤を活用した訓練が行われており、こうした事前の準備が功を奏し、自治会の判断のもと、実際に壘の差し込みが行われました。

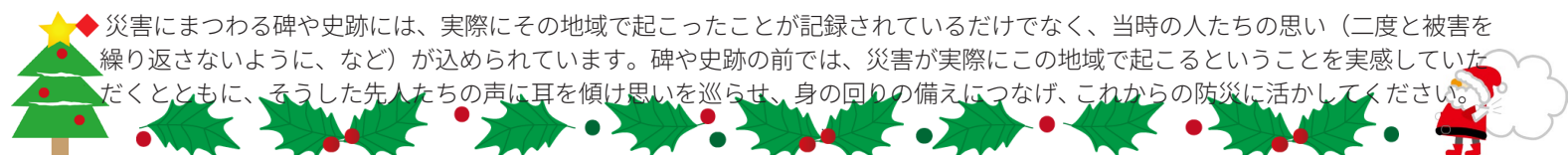
壘堤は、堤防付近の住民の移転を避けるため、また、川のある風景を損なわないためなど、地域の人々の暮らしを考え工夫された構造であり、その運用には地域住民の方々の理解と協力が不可欠です。治水の歴史とともに、地域の方々の防災意識が醸成され機能する貴重な事例と言えます。



西日本豪雨の翌朝の揖保川の壘堤（ミツカン水の文化センターHPより）



◆ 災害にまつわる碑や史跡には、実際にその地域で起こったことが記録されているだけでなく、当時の人たちの思い（二度と被害を繰り返さないように、など）が込められています。碑や史跡の前では、災害が実際にこの地域で起こるということを実感していただくとともに、そうした先人たちの声に耳を傾け思いを巡らせ、身の回りの備えにつなげ、これからの防災に活かしてください。



◆見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち バックナンバーから

● 震災記念堂 (vol.30,2016.10)

所在地：岐阜市若宮町

交通：名鉄名古屋本線「名鉄岐阜」駅北約1km

岐阜市若宮町には、濃尾地震2年後の明治26(1893)年に建てられ、現在まで守り続けられてきた、濃尾震災記念堂があります。濃尾地震にまつわる慰霊碑や、記念碑は各地にあります。記念堂は、他に例を見ない慰霊のための施設で、3回忌の前日の明治26年10月27日に開堂しました。

開堂にあたっては、稲葉郡岩戸村の真宗本願寺派善龍寺の生まれの僧侶で、のちに第一回帝国議会で衆議院議員も務めた天野若圓あまのじやくえんの尽力がありました。記念堂は宗派に属さ



ず檀家を持たない施設であり、開堂以後、若圓とその子孫による多大な苦勞の末、現在まで受け継がれています。

記念堂では、毎月28日の月命日、10月28日の祥月命日に犠牲者を供養するための法要が公開で行われており、平成22年からは、祥月命日に、過去の災害を伝える活動として、資料の展示や地震防災に関する講演などの記念行事も行われています。また、震災から120年を迎えた前後からは、「濃尾震災の経験を後世に伝え、地震に対する知恵や情報を蓄積して、二度と大きな被害を受けることのないよう記念堂を拠点として、広く文化教育活動をおこなう」ことを目的とし、濃尾震災記念堂保存機構が組織され、遺産継承のための試みも行われています。

このように記念堂は、発起した若圓の意志を、子孫たちと、犠牲者を慰霊し震災を語り継ぐ使命を感じ取った地域の方々が受け継ぎ、現在や未来に向けてのメッセージも模索しながら、120年以上にわたって守り続けられています。

◆詳細は、見てみよう！歴史災害記録と旬のあいち vol.30 (<https://www.gensai.nagoya-u.ac.jp/rekishijishin/geppo.html>) をご覧ください。

★ こよみのよぶね

岐阜県では、千年以上の歴史を誇る美濃和紙や、提灯、和傘づくり、長良川の鵜飼など、古くから川文化に育まれた工芸・産業が栄えてきました。

こよみのよぶねは、岐阜の伝統文化を背景に、和紙と竹でつくった巨大なあかりを鵜飼観覧船に乗せて冬至の夜の長良川に流し、過ぎゆく1年に思いをはせるイベントで、鵜飼観覧船のりば付近から長良川右岸プロムナード一帯で開催されます(2022年は12月22日(土))。黄昏の空を背景に、和紙で彩られた1から12の数字と干支の行灯に明かりが灯され、長良川を回遊します。



岐阜の旅ガイドHPより

2006年に岐阜市出身のアーティスト日比野克彦氏の発案・呼びかけで始まり、今年で17回目を数え、岐阜の冬の風物詩となっています。

～鉄道で巡る～

名古屋本線、各務原線が乗り入れる名鉄岐阜駅、東海道本線、高山本線が乗り入れるJR 豊橋鉄道株式会社HPより
岐阜駅は、岐阜市の鉄道の玄関口です。両駅からは岐阜バスの忠節長良線で、壘堤のある忠節橋まで移動できます。

かつては路面電車が走っており、忠節駅まで路面電車で移動できましたが、2005年に廃止となり、軌道も撤去されました。車両は現在も豊橋鉄道で活躍しています。



●ブレイクタイム●

♪ みんなの森ぎふメディアコスモス

ぎふメディアコスモスは、市立中央図書館、市民活動交流センター等からなる文化施設で、建築家・伊藤豊雄の設計です。中央図書館には、岐阜の山々の稜線を思わせる木製格子屋根から、各エリアをやさしく包み込むグローブが吊り下げられ、明るく快適な空間となっています。市民活動交流センターには、最大100人収容可能な「かんがえるスタジオ」や、一面鏡張りの「おどるスタジオ」など、大小4種類の工夫を凝らしたスタジオが備えられています。



ぎふメディアコスモス HPより

◆この地域の災害に関する碑・史跡、資料・体験談集、地域に残る古文書、研究資料、郷土史研究者・団体などの情報がありましたら、gensaisan2014@gmail.com まで情報をお寄せください。

◆この地域の歴史災害記録をオンラインツアー形式、マップ形式で紹介しています。各地の碑や史跡等にご興味をお持ちいただけましたら、『災とSeeing』のホームページ (<https://www.saitoseeing2020.jp/>) をぜひご覧ください。

(発行：減斎の会・名古屋大学減災連携研究センター 2022年12月)

